

# 社会運動ツーリズム

## ——「個人化」時代における抵抗と連帯の旅——

立命館大学 富永京子

### 1. 目的

現代社会において、途上国支援や開発、環境問題を取り扱う NGO や、国際会議への抗議行動など、運動が取り扱う問題はますますグローバル化している。さらに、メディアの進歩や移動手段の多様化は、社会運動参加者が移動を可能にするという変化を引き起こし、「移動」にかかる時間や労力、お金といった資源量を考慮して運動に参加する状況を作り出す。そうした状況の中で社会運動に従事する人々は、自分たちなりの政治的・社会的理念を持った移動や滞在という、「観光」型社会運動の手段を講じつつある。本報告では、バックパッキング・ツーリズム研究と社会運動論の視角を用いて、人々が社会運動の一環として遂行する旅の「移動・宿泊」、旅人同士の「相互行為」に注目する。それにより、「観光」型社会運動がどのような現代社会の側面を反映しているのか明らかにする。

### 2. 方法

本研究では、最終的に遠隔地でおこなわれる社会運動に参加するという目的を有しているものの、その目的を果たすだけでなく、周遊し寄り道するような社会運動参加者たちを対象として彼らの旅行記や SNS の投稿データを補足的に用いつつ、インタビューを行い、そのデータを分析した。

### 3. 結果

分析の結果、活動従事者たちは宿泊の場所や移動の方法において、自然保護や資本主義への対抗といった政治的な理念を宿泊地の選定や交通手段の選択に反映しようとする。また一方で、活動家たちは宿舎での交流や野宿者支援やデモといった活動をともしながら、普段ともに活動する人々とは異なる運動をする人々と出会うことで、今までと異なる社会問題への認知や、新しい社会運動のやり方を学ぶこともある。こうした点で社会運動ツーリズムは新たな「政治的社会化」の機会とも言え、その過程の中で社会運動として「あるべき旅」と「そうでない旅」のやり方を識別するようになる。

### 4. 結論

人はそれぞれに「社会運動らしさ」を旅の随所に込め、それは他の旅行者との相互行為や情報媒体を通じて伝えられる。その中でゆるやかに「行くべき場所」が共有され、「社会運動ツーリズム」のルートが定型化されることになる。こうした点では、個人化・流動化時代の「聖地」をめぐる巡礼(岡本 2012)とその特質を共有している。活動参加者たちは、キャリアの個人化・流動化の中で、人々は既存の価値観や社会システムに対抗しようにも、既存の価値観や社会システムの捉え方がそれぞれ異なる状況に直面する。彼らは、旅を通じて他の活動家から「逸脱の作法」や「対抗の作法」を共有しながら、再度他者と連帯しようと試みるのではないか。

#### 【参考文献】

岡本亮輔, 2012『聖地と祈りの宗教社会学——巡礼ツーリズムが生み出す共同性』春風社。